

飯野高校の探究学習 概要

◎1年次は、学校設定科目「えびの学」やLHRなどにおいて、地域でのボランティア活動、飯野地区の小中高連携事業、国内外の学校や団体との遠隔授業、講演会などへの参加を通じて、地域とのかかわりを深め、視野を広げていく。2・3年次は、学校設定科目として、普通科総合コースには「地域貢献活動」、普通科探究コースには「地域探究活動」、生活文化科には「地域支援活動」を設置し、各学科・コースの特性を生かした「実践型課題解決活動」に取り組む。いずれの学科・コースも、地域の自治体、企業、NPO 団体などとの連携を軸に、地域の活性化や問題解決に取り組んでいるのが特徴だ。

卒業生の成長に見る
探究学習の意義

体験談 2

地域の課題にチームで取り組む中で、 協働の重要性に気づいた

宮崎県立飯野高校 普通科探究コース 2019年3月卒業
川野七海^{ななみ}
現・九州大学共創学部2年

失敗したから、 自分を見つめて、前に進めた

2年生になって「地域探究活動」が始まった時、正直、私はあまりやる気がありませんでした。地域で何かをすることが、自分の将来とは結びつかないと思っていたからです。5人チームでの活動も煩わしく、他者と意見を交わして何かをつくることも楽しくありませんでした。

そんな状況でしたので、えびの市長に提案する地域活性化プランも、私たちのチームはうまくまとまりませんでした。市長へのプレゼンテーションでは、「えびの市ならではの大きなパフェを作り、それを軸にしたイベントを実施して、観光客を呼ぶ」と提案しましたが、市長には、「アイデアレベルから脱していない」と

賛同を得られませんでした。他チームが「面白いね」「それは、よいアイデアだね」と褒められている中、自分のチームだけが酷評されて、とても落ち込みました。

そこで初めて、「これではいけない」と思い直しました。振り返ると、チームの中で私は自分の考えを押し通そうとばかりしていました。協調性の大切さに気づいてからは、元々話し好きだったこともあり、メンバーの意見を十分聞いた上で自分の考えを提案するとともに、話し合いをリードすることも心がけました。

地域のために何ができるのかを話し合う中で、私が元々関心を持っていた国際交流の視点を地域観光に取り込むことを考えつきました。梅北先生に相談すると、「君たちはどう思う?」「ここはどうする?」と質

問が返ってきて、答えを教えてください。それはありませんでした。でも、梅北先生と話すとき、違う視点でアイデアを考えられるようになったり、地域の人に話を聞いてみようと思いを押し付けてもらったりと、前に進むことができたと思います。

地域で、台湾で、学んで 見つけた探究したいこと

私たちは、地域の旅館の清掃活動や花火大会の支援活動など、自分たちでできることに取り組みました。その中で気づいたのは、地域の人々が、地域に古くからある京町温泉や吉田温泉の温泉街を愛し、誇りに思っていることです。私たちも地域の一員としてそうした思いを実現する活動をしようと、「京町・吉田温



かわの・ななみ

高校時代に立ち上げた「京町・吉田温泉郷活性化プロジェクト」で卒業後も活動し、地元の魅力発信に協力。地域団体「APEえびの」の高校生副代表も務めた。



写真1 観光客へのアンケートの結果、京町・吉田温泉郷を知らない人が44%だったことから、まずはメディアやSNSで温泉街を取り上げてもらおうと、オリジナルの提灯で温泉街の雰囲気づくりを企画。さらに、旅館を1軒ずつ取材したオリジナルのパンフレットも製作した。

泉郷活性化プロジェクト」をチーム活動の柱に据えました。

次第に、温泉を活用した地域活性化について深く知りたいと思うようになり、「トビタテ！留学JAPAN」日本代表プログラム 地域人材コース」を利用し、3年次の夏季休業中に、日本のように温泉街のある台湾に短期留学をしました。

台湾の温泉街では、古い建物を改修して観光客を呼び込んでいました。新しいものを作らなくても、既存のものの再利用が新たな魅力につながることを学んだ私は、帰国後、チームと話し合い、温泉街の雰囲気づくりのために提灯を灯すイベントを企画しました。提灯の試作品を作って、温泉街の人たちに提案し、

写真2 2019年8月に開催された「えびのスプラッシュフェス」は、温泉水を利用した水鉄砲のバトルを中心とした温泉をPRする複合型イベント。川野さんのチームが企画し、市に提案したところ、えびの市とえびの市観光協会から予算がついた。川野さんは、高校卒業後も引き続き運営に携わった。



その意見を反映して何度も作り直しました。そうしてやっと形になった、明かりを灯すと「京町」「吉田」の文字と各旅館の名前が浮かび上がる提灯は、温泉街の人たちに納得していただけるものでした。卒業まで、一つひとつ手作りし、すべての旅館を訪ねて手渡しました（写真1）。

新たな社会で求められる人と人がつながる観光をつくる

私はそうした体験から、地域の魅力化について探究していきたくて、九州大学共創学部を志望しました。AO入試のグループディスカッションでは、学校のチームでの議論以上に多様な意見が出されました。

以前の私だったら、自分の主張を押し通そうとしたと思いますが、その時は他者の意見にしっかりと耳を傾けながら対話することができました。

私たちが地域での活動を通してかわった人たちは皆、優しく、地域のために一生懸命でした。そうした地域の人たちと観光客との触れ合いの場を設けることで、地域活性化につながり、高校卒業後もイベント運営に携わりました（写真2）。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、思うような生活ができず、ストレスが溜まり、他者に優しくできない人が増えていると感じます。そうした時だからこそ、私が目指す「人と人とのコミュニケーション」を軸にした観光が求められるのではないかと考えています。

先日、飯野高校に通う妹から、「大學生の先輩と高校生がオンラインで交流する場を設けたい」と相談されました。地域の人々との直接的な交流が難しい今、まずは先輩の経験に学ぼうと動き出したのです。後輩が関心を持てるような活動を私たちができていたことを誇らしく思うとともに、大学では、私が目指す観光のあり方を探究しようと、改めて決意しました。

生徒の成長を見つめて

たきつけて、手放す支援で自ら考える生徒を育む

宮崎県立飯野高校 進路指導部長 梅北瑞輝



私が生徒と接する際に心がけているのは、生徒の考えをまず

は受け入れ、たきつけて、手放すことです。川野さんのチームは、市長への提案以外にも、企画を地域に認めてもらえないといった経験をしました。その度に相談を受けましたが、私は自分の考えを言わず、その質問を問い返しました。すると、生徒は自分たちで考えを深め、奮起して前に進んでいきました。生徒には、きっかけさえあれば様々なことをやり遂げる力があります。「自分も、これだけのことができる」と自信を持って、自ら走り始めるのです。川野さんは、台湾留学での経験を経て、えびの市や自身の活動を客観的に見つめた結果、地域の枠を超えて多様な人々と協働する重要性に気づき、志望校選びにつなげていきました。

今、本校の生徒は、コロナ禍の中で自分たちができることを話し合っています。「飲食店に課題を聞き、支援策を考えます」と、行動を起こした生徒も現れました。自ら考え、行動する力が身につけば、予測困難な社会でも力強く生きていけるでしょう。そうした生徒を育めるような支援をこれからも続けていきます。